深情俚言 教訓女今川

智

へ 13
1825
4

深情俚言 女今川巻之四

第十二回

偖もおぎんハ冥途の人となり行しに家内のものハ頻りに哀しみを催しつゝ皆く袂を志ぼりけるかゝるおりから見世の方へ入来るハ六十歳ばかりの老母あり「おゆるしなさい」「ハイ入らつしやいおかけなさいまし」「わたしハ田舎ものでございますがお内にハおぬいさんと申女中衆が、もとハ吉原などに居らし人で当時

松下水流處藏書

門號 へ 43 1825 巻 4

お門ニ居ると申事で屋敷へ勤ニ參りましたが
こなさまは遠ひハござりませんか 忠「ハイ おかゝさんハ去
大病でございますの 何の御用で御ざりますの だ「ハイ 御病
気でもよいのならどふぞ一寸お目にかゝられますならお
おつれやつて下さいまし 忠「イエどふもお目にかゝられます程
容でハござりません だ「それハまアそのやうなさやうならバ具病
まアト お目にかゝつて申たい事のございますト いふ中 何事のとおもふ 夜
次郎まくとふ中そろくすこしも出て 夜「どふぞちよつとのうちお出なさいまし だ「ハイ お出さん

ご国許でございますの 私しハ手前の方の田舎でござ
いまして裏店と申まするの悴が大病の様子については
内證ゆへハ様のございますから参りました 夜「ヘイそれハお薬
の御用でございますか あらバ手代でも手そろおつしやいまする
私ハおりし是迄まゐりますの だ「イエイエ薬のよふなものでハござ
いますのお前さんでなくてハなりません委細と申ハアノ
お娘さんの事でございますうけたまハれバこなさんのお
世話ニ久しくなつておりますそふなが是ゝのらゆ

まくいがあるハ一体体の義理と深く云ひかゝるがの
あつくかましい詮議も兎角申さるハ急度女丈夫志
よふならふと御手なひなされつくすぐに向清の世話
まなつく存せる内も時々あつて事も有てふくござい
ますが志ぐハ義理の方へ約束致し行とても一寸のが
逃にだまされるも誠と思つてたのしんでおりましたと
見へますが何を申も義理ハあたりの手代子手習師匠
いつしく細い瘦世帯も寄合の事でやつくと言日すぎ

の困窮ゆゑその夜ぐらしかくづくも小まちなどちとおばん
さんのらそらつく来つく二人ヶの口さそぎのたすけにする位
な仕合ツイ義理ハあきらめてくおばんさんハご存なくて
何くまぬ風でいるられ義理めハ三十になつて今に女
房もそらずに居ハ手習むすめを苦労する日夜
内気なさまなをその身へぶらくと遊び出しつふいつき
むすめも論の夏へ葉も行稽も自まなし家銭反異
も賣渡し手代衆の親仁連つてかくづくの仕送りで

かん病致いたしましたが段々おもる大病ぐもや十二三
日食事もいのずけふけふは迚も助かりませぬやうになりまし
たゞ今医者さまのおつしやるにはどふぞあつちもあれど
此病を治すにはたゞの薬をのまねばならぬのら十や
二十の金では生ぬとのことそれ故またしの思ふにお姉
さんの為後なりとも薬くせめて一ト口なりとあがらし
の手づから進めまゐらせけふぬあがらでも迷ふ
まうのまふのとぞんじまするまうのでございます

病人ハうまとてもお姉ん〳〵とお前の事ばかりこまり切
どふぞお慈悲にお姉さまを病気ながらお隠しおき
らずに余り無理なるお願ひながら為後りくださいま
しまいが始めて御目にかゝりてこんな事を申も恥かし
いかほどもいくらでも下さいませ夫ではござりませずばお姉さんに御苦労
なされてくせめてくも薬代をお貸なされてくお助なされて
下さりませなをつくらあはれ云ハ命の親とよく
申せしならばそれまでの切し金になりまして悪しい念も

情しまうく一生の悪ハ忘られますまい二十三十の今ハ
ぶしつく下さつたとておぬんさんハ踊子もなりますまい
またくも恥のしながらまあハお妾にでもして浅
草子出店も出来ましてけれど肉の人の苑あれなら
義作めの放蕩子なつたくおぬんさんにおこんさく入あげ
そ今ハなかなかやさしい事でハございません夫ハ何もかも
けよふなるまでございませんト ふところをさぐりて見ぐるしくさしきせるハおぎんの自筆なりこれハ爰
次郎もきもをつぶせバ なをこのあたりハ涙をふき 是ハおぬんさん母へ来て お貝子らくつる 来て
申さづなれども お合せなされて下さらぬのら余り憚り
多い事ぐお氣の毒なからあなたへ申するのでござい升
ぞふぞいさゐハおぬんさん母へお咄なされて下さいませト泪ぐむ
なきくどきながら志やくりあげくなく 夫を次郎ハそてあまりし 爰 〽是いづれ私の志つてゐるでハなし
精子おぬんハけさにハ時迄も取のらぬ大病ぐ枕を咳こともい
うこともなりませぬのら氣の毒なぐト いふ折から表の方ニ 年ハ四十あまりとおぼへん
ある尼法師の花色ちりめんの衣を着 緒子のけさをかけねずみの衣り 若しふくみ手ごろの男を供につれて 通りかかりこの何の供ハいひ捨て
因縁をいりきける 供〽ちと物こませう ト 法體 いごいけ 志〽へいへい 是おさ茶をさ

云やせト法付(ひきつけ)をエて流と訴訟麝香でトいひながらそろそろ〆(だんをちぢき)
て代金ハ弐三分ト云ふ事になりますれバ卵子一角の代でござ
あ設実になりまするけ売りますの 供 ハイその通りの恐を
京のよくある遠ぬやうにまさいませ 忠 ハイりこまりま
しコレ徳や茶から松京の箱を出しくこい笹出もつ
いそぎ出しかけよトいの供の男手葉をうけて改てみて見の男ハ合点い中より合を出しくちい志ろものを文と
供男 何の此こんさるの極ミだのお医者さまなども見えるからは病人と見へまするな 忠 左様でございます病人がご
ざいましたのまい世多ハ内らでござゐいますの今朝あく
なりましたに夫より混察いたします 供男 左様ならバ三たしの因果
いたし死んでも二十日附たぬ内ハ此お構で薩生いて
ますの家内でござゐいますのおかみさんなげきつくごろじ
ますまづ大仰な人ハ生まれますそれにおかれなどでハ一ツ
銭も更ませぬほんの施しでございますのゆけふもお屋敷へ
是ハ此病人でもあるでございますか 忠 へイ左様でございい升
お夫ハマア幸ひな事でそれならバ死人での生かへるとおつし

やつぱりぞふで一ツぷくめしあがつて下さいませト　おくへいりて茶わんをはこび
忠「モシ旦那さま奇妙な人の是へまいつて　友「なんだ　忠「比丘尼で
ございますが御祈祷が奇妙で死んだものでも生かへると
申ますがお頼み申たらよかろふございませふ　友「それハ幸ひ
だのよくおやつたろうあつて信ぜられますからあ　忠「イヱまづ相が
ちと申そうに立派なものの買物なんぞをいたして急な用
もあるとおつしやりますが随分お頼み申てもらひて下されませふ
な様子でございます　友「それハマアよそのおかどれトいつて迎へ出供の男子もらひて

友「コレハそれハあなたハこの御祈祷をなされてくださると
おつしやるおかたでございますの　供「さようさ　友「へイこれハあなた
ならいらつしやいまして　私の後家でございますの今
日ハいろいろあるのでござりましてきまするつきましてハ何の所かお
申ますする御祈祷をねがはうとおもつてくださらふとおつしやるそ
うでございますの急の病気で今朝息をひきとりまし
たのまだおかしあつてらい西のございますのら一族どのお頼
申まするどうぞ助けてくださりまする　尼「ハイ今家来の

お手代衆へお咄しやうそうでござゐますがのぜんたい今日
ハ山の手のお屋敷へ只今あがる所でござゐますがのさいぶん
そふいふ事ならバあちらハおそく気つかくも一寸おのんであげ
ませうの　夜それハあなたのたうぜんじまんマアくおあがり拵ばせつ
ろくドおくへ案内しくいろいろおもてなする丈より祈祷ちはじまる床の間ニ大
黒の掛物をかけ香花燈明をさゝげなどしく美麗
をつくしく荘厳し前ニ経机を直し心経巻物など
をのせ名香をこしらへその脇ニハ傍の男子梵天やらの

ものを持せ金尼ハたすきをかけて加持祈祷する
水晶の数珠をおしもんでせめのけく祈りける次の間ニ
ハ親族一同手代でも近のこらじ居ならびおのんで居るに
色く子詳織しらく何事言葉などヨ居らく沢山子還も
つくろふうら何の出るやらぶというもありやくあの何
ぶといひ目をうらするあるある気がうら何も眼られる
事もなきまひ一生見や死気などいふ事ハあるまひ
などゝこそくと下女や何のが咄しく居る内程なく

この男の持たるへいそくふしぎやさてもくと動き出し
目をねぶりて志ばらく居たるのやゝあつてさも苦し
げなる声音して 男「アヽ苦しやくるしや我のみぬ肉ハ
おぬんも生きぬぞ 尼「へいそくの言りやうの生臭ぞなり死
臭ぐなし鳥獣のたぐひぐなく元よりの神仏の臭でも
ないぞのマア何ものじやへ 男「拙者ハ源氏方にて九郎判官義
経公の臣下にて名を得たる武蔵坊弁慶と 尼「ハテ弁慶とい
のハ昔の人じやがそのぞふして来たぞ 男「ヲヽよもさてこそ遥まい

裏のききための板の蔦を段て見ればそのる 尼「なぜ又
ちぎんを救ふこのぶ 男「拙者を志ばらく恋て眼の玉へ
計をさしおいてくらうさしト いふ法師ハさしづてあらためさするに
ござぶ板の経文ごと拝場の板の外されて直
手まわしてしばし紙にて計が見当て立て見ればむさせるらかなすすき絵子
弁慶文を出したる手にてそれを打ちて糸まきの中より手つのひもの糸をぐるく
ときにありそれにまわりをさしてしたぞのでてけど中の絵を見るに弁慶のむ称のあ
たりからめの玉へまわりを当てくありまことにふしぎと見を法師に見すれ
かつてちぎんさまのおぬいどのをするに附ぬきて糸なんどを巻てあてたをついそう
ちぎんをする時にまきき出したらなりんさるまでもへ絵とふその八指あそびのま
さきまでもその志んのこゝろと見へまして中なども嘆て
体の男まさそのひそりまびてしんにかきやらなどよむ手眼をもれてるる方
またく思ひつてあるへいそくもひざのうへにおくく又おんで 男「アヽうらめしや板
居ると派いおそろつきし声にて呼をよんでひたとさく

たちやおのれおぎんめ生きのそのく生きの志はせぬうぬよよく
覚えてゐろトまなこをくわつと見ひらきて行をちゞめ往生をさら
まゝ見ればそのぐんたよく寄きまずきゐさ夜に寄く
ぞつと志くきもをけしそもいつのなるその果ならんとおそれ見かく有り
からに法師はあせるになつて見んをならし志きりに珠数をかしえんで
尼「一生果と見へるぞ何をのぶい　男「見たしは因の者ぞよ　尼「因のただ
まぶ　男「だれなその因縁におぼへのなきぞよ見たしは
まだ見な　尼「そりやおまきさんの何ぞ又おぎんさんに恨その
そのぶい　男「何といふぞといゑばおせ話にもなつてそのぶ
から恨むまいとは思ひますけれどもモウモウくく因縁のそ

まへよるをみるとなんぞこのモウモウくく役がうらくくぞぶ
ぞおぎんの死ぶはおふくばよそのうらと思ふにつけくもあんまり
因縁の可愛ぞんなさるうらむやしうらくく今によく
とり殺しくうら役ぞのわくいト　主人は数見合そのをもいきねど読　井筒のおぎんはそろくくに一トるに今は時
おまきはおぎんの枕にせん香を立てくいさるぞのほこのぎしきへよんどいきめ話をきかして
おまへはそれぞの年毎のへあまて枕近に実い世話におつてそい　おまむ「ママぞふくくそのぶろう
あんな文字のよいそのをかしでも恨むなどくいふやうな
せ文のわくそのあんまりの事くちしはあきれけへるよト網とえふ

いひけれバおまさハ志んぞうをつぶし赤くしてなみだをこぼしながら〽ヲヤけしからねへどふぞ
くマアそんな事のいひませうぞであゝ極な大悪の悪人と
いひ文覚上人なんどまであんな事可笑のつらく思ふをも
ついまう心そのうの字でもあそこんでございませうのヲヤ私
どふ志やうトなみだながらそんな事を思ふくらいならバあんな事
若労して床る目もねぶ子貧病ハ志ませぬハおマア
此様子ゆゑ下さいませトその顔く青くなり赤くなり泪をうくなげくまでおまへも目をふき
〽思ひもそふあろふと思ふがのアノさうきの極楽といひあの

比丘尼さまハおそでござい人だよ遊ひハあるまいとな〽
でもございませうけれどヲヤ〳〵私ハまだふしんなのころふト
けり上臈のおまへハ尼〽それハマアどふいふ訳の志りませぬがおま
づ人といふそのハいづれおろそかなれど女のつミハ第一がアもん
きといふそので大宝積経といふお経ハ一切の女人多く過
を生じその心流蕩傾覆してつまらすとお説なさい
ましてあり又法法集要経にハ女人諂曲おおし常に
嫉妬を懐きに若子和合恭を生ぜんとお説なされてある

のら何よりつゝしまねバなりませぬ聖人の教へにも女子
妬(ねた)む心なきハよく百姓(ひやくせう)を育(おほ)ふとあるも尤な事でござい
ますそれにまづ人を呪咀(じゆそ)するなどゝ申事ハ女とや申ます
よく／＼心のせまひ人のする事で人をのろへバ穴を二ッと
世の諺(ことわざ)にも申通り古いおかたも浅ましき人をのろはで
それハそれ其などのうたにも生ふといふなるとハ御存でもござい
ませうが伊勢物語にも書てありますから必ず／＼と
思案をなされぬやうそのやうな心ハけしてお出しなさいますな

且私へハ相談もなくいづれにもいたしませうから其の念(ねん)
をおひきなさいませトいふ其の男ハうちうちなづきにハいそくをひざの
ふるおかみ目をねぶる子又祖なくうちつけ
たる月夜ハへいそくなぎさくとおもひまちこのことならし事を云ふるし男へハあれ
きもちまちふていきをつきまなこちぢらるやうげんしよくまて
是でこそこの御道をよくも〳〵だまらう夜叉のやう人
ぞうな外の眼での男人とハ遠ひおもひこそおまんを生し
ハせぬぞへ尼ちまへハ何人でもおれハおばんと二世の約束をし
て疑はまで忘らしたお義作といふそのでよくも叱を
ついことなにくい女めえへこのく
これを嫉く一座ハおかしく笑ハれ合せ一云出スそのおかしくたがひま

きもをつぶして耳をすまし物語りするをも聞入たりしが さてもうぬ田舎にて出家ハナモウク
どんなに苦労したらとて出家ふけ衣ハ大金の菓がおかげハ
出家も出家ハ恥のしらぬからうぬハ先へ冥途へやつてこそ見へて
あろ今に茂次郎めも思ひしらせるぞトいかりのがんざしよくおそろしくきはまりて
はらのたつるに怖くおそれ多くけれバ尼ハしらずをおしかしとしと 尼「それハ又ぞんぶんなれバ念を入のぐ
男「ぞんぶんするとて出家の病気ハ治しても治らぬが定命さへ
あればともかくもしてやるハト以前に人々に先に立る手代の方の田舎 おそアのいふ事がよく身せうをあわせるごと
いよいよ左様ならば能くおそれ入 尼「いづれ且那に又相談してから見ようから必ず

おかみさんも茂次郎さまもうらまずにその念を引のがよい
トいふ事ならずきき且那を始の次ハまづまづ出して 男「出家ハおかみさんにハなんにの出家
の仕法があるから茂次郎や何のかのと一言もまぜなければならぬ
ぬ 尼「死ぬと見へるのだれの怨念でこの恨をあらはけを
いひなさい 男「まづおれの死ぬからの法事ハ親類やちの衆が
あるのから時くにさせるけれどもついに仏のけふ寺参りをする
事もなし 費へするにきそのなくて叶はぬ番頭の年八
をなぜひまを出して我侭そのやうに見へるも年八十若

も深切なそなたの手段まのぬとハ彦次郎どの正可存ちらの
事でいふらい彦次郎こそ此家へ来て居るべきやつぐハない
本店をうろめくて事といひ金を取をも追出しおどして
一ツもおれが身の落ぬ事むをのりたずによつてならぬハ思ひきら
せねバならぬ 尼「それハいづれとも又相続たよりのらい金を入て
おぎんを生之へさせてくださるまいの 男「ずいぶん与八を之へ又
お姉さんを呼之へてく第とて悪うてもあまゝでの身のらいまで
なれバ念も入て外のたゝまもそれくまのぞこの悪みまする

とまぐ死きてぬ悪天命のてゝくるハ志らくもないぐのさい
ぶん生之へやろう ト 此門彦次郎も気の毒の忠七又前時隠居して居る
忠七清も来て男居るこの合点ぬ事ありとてく
目と目を見合せひそのその子さへやさしくうちつどひ
うなづく折から見世へむかうハ法苑徳を纏で来りし法師入 僧「おたのみ申ませう
徳松「ヘイ何をあげますん 僧「イヤ買物でハないぐの此宿の主子ちとあ
たいらつそうふ申て下さい 徳「かしこまりまして ト おくへ入ると 忠七出て 忠「何の
御用でござりますの 僧「イヤ外でもないこの今朝死ぐこの
孫娘子たゞの身の祈祷をしてく生之へさせて志んぜたい
からそれやらく下さいト いへバ忠七それくおくへ入りくくとふまおれましう
たのんで見るが大方のうゑといふはそれの修法まうく

といへばやがてあがりてくまちく
〻の比丘尼をきろうとゑらく 僧「其僧ハ何をさつしやるのぢや 尼「ハイ〳〵
其ハ 僧「其でハないよくある行儀のほかのたなコレ〳〵
だれぞ此比丘尼を志ばつてやさいイヤそこに居るやつハ八巻寺
の門前だならぬから何か志て邪魔されてそんな事を志ておくトいふ其の僧
の男ハ手げいざ手をとりのこらずくゞりて付てうごこの世ず比丘尼がのまゝる
をさきより御用ぬ事を志て由忠七若次郎ちんどおりの手にあつくおさへけり
法師やがて比丘尼をねめつけ 僧「まづ其方ハ手あまりきい法外なる法被といひ
加持の仕法を極手ハあらしく御留りのある此ほど今になの
まれし八巻寺の鬼子母神へ毎夜に参詣しく呪咀の釘
をいそぎの事へうつくハおめ出たなサアゑよみていへドレその
色を改めて トとりあげてひらく手づゝみを見るに中に一通の手紙ありひらき見るにその文に
先頃ハ色々御めぐみありがたく存じ参らせた
のこと中ゆ一けんの事ゆゑぞ明日よりきつと御たのこと中ゆ
稀よくまゐりゆへハ御礼ハきつとく申上て下ゆ
私のうらみに申ハ御まへ中ゆ色々おまきをいらぬ世話
みて亀井戸まで気持ゆよりる越り夜次郎が門へ
こみゆ用思ひつきても逃ひ出しゆて只今の仕合せ

帰り後のたちは由息いこんをちらし中夜ざんしゅに
こよおよに此たのこ中こらりくあらぬるも与へ今より
うねらく此たのこ中は至り此寺りをのらひゆされたくは
はさいおせのさ居も此承知まて其の日ゟハ先へ四出のつも
ア手此住はきんするも其の日よお入用だけハ与へ今より
此むらしてあるる手此住はまづハあらくいと

六八日

妙法尼さま

房より

トありこ通をきらのによむに人くきても此をつぶはさきよりひとまゝの
それ而く拾手を咒むる田舎の寡俗と云ものハ母と云人も化が
あらわれくそうし手返出んとするを人く守へくうご哉代やめくらの僧人く手むかひ僧いつくい口ハ誌さいく
行御の僧ぐござるのは何も地こうら頃の門おどへ参詣らく
雑司ヶ谷手返留し夫より八巻寺と中寺ハ法縁のもの
住職も出れバそこへ以五日返留する手境内のそくの木へ
釘をうつくそのの髪と中のらひそのてやらすを見るに
尼ども一年ほどいひてくこの過りそれのらでそては
咒咀さるる人をおさるくとくと見ても志くとぞんじらく

拝る間そのちハ来ぬやうすで夜中ひそかのよう見るく拝ても
つい見付だそれ因果法を持くその釘を考るよう殺気が此
あたりへむかつくちよる因果だんく殺ねるく殺害を見あて
よまみまいだ此家の屋根よそてまつつてよつく渇く拝す
を見るく似当らもあらハよく伏の吞こあるやうよ相済ずよ
能かきめくるぐく法を立しく釘をぬいつく進せやうと存
るく来つてぞの此手紙といひ尼といひ相違もないやうなござる
又先へだまそで来つてく人もござるそのトいふよ人くまことをきる思ひをかけて是を志ねな

このおきへかきたる田舎その者とふたぐをひきいだし一門諸よ残のぐさい仕合くござりませんる是で先よ来つてそのくござりまする志状ハかくくとくくもれ
より此二人をきびしくせめるよ尼ハあのらさ面よもくぜく志けるハそと田舎者なからその向ふまへんへまいつく女房と色やさくく有りおぎんをのろいのるをたの
まれしよりかの与八からたのまれ金もあづのりく薬らひよよりく祈祷をせし
ことその後つけるときくやらくと与八お妙を二人のたのこしあり八のるの門
書をたのむく其よ来くこれよいひ世裏のごみため無妻の忍をもちをさしく入かきくく何ぎよ思ふせるなどのこらず白状するよ又々のおぐおもせん
きかせるよ是ハいつい与八の母あるく与八よおそらぬ事ときくそのみふあてまおぎんハ母ももなく死んだを葉ひよつけこんでく殺もせぬるを与八お妙ぞ妙法尼ぞ
と志めしあるせ金よせんとかたくこなり既くらゐでつぞのその仏ひよおてもおぎんが自害とみせかけるきせくハおぎんの母親の所為じあらく山谷へ人を拝る人よ
金をちつつく来るくそらハしまへおぎんのこゝろのりよ見へつるよあるくそのかおきさのるなどうだきとてまいびてるまあるくてとくくものりとなる化の皮あらくされ

けれバ二人の者そのおもむきをうかゞひしに法師の法花行者が祈禱しけるこの誦経
めでたきけしきふしぎやおぎんハ息をふきかへしたりけり家内のものも歓びよろこぶかぎり
ちよろこびあへり姉ハ洞をこぼしけるそれよりおぎんハおいおいこゝろよくびやうき次第
に快気にむかひけり実に妙法の功力ありがたく遥着於本人のちかひのごとく悪
人ついにあらはれくその身のうへはうちおもても銀がかうの仏力より
おぎんがひごろ信心堅固なる結縁にあひたりと人々随喜しあへりけり

第十三回

夏衣きてしはのなまぬらん残れる花ハ々も散て
と新古今のおのごとく人の浮沈も花に似たりこそおかされ
さんてふともさきに愛敬へうつれるとの不思ありといはゞいと
まを出され沈淪ハ親のもとに居たりしがけふの残花ハ
きのふひらくと崔恵童が詠せしに似たりし
のごとく追々に今ハ古びの来る器物と遠びの婦人の古び
たるハ口のかくのまらざるもある人の世話ならぬ人の風流
とある向島の小意気なる菴に居たりしも夏のはじめ
ありく青葉にくもりきし窓をさゝへてもなくもなく
気出な住居に年もまだし新樹のこのもとへいく鶯
ところがひのまゞ解やらぬ卯の花の垣根がくれに音信
くさもちよりなく時鳥自由自在に少あるが湯屋へ通し

豆腐屋ハ一軒あまりく陽なる芸彦家居も大江戸の
あこひろごる武蔵葛飾の片ほとりに出格子あまく
紙の板塀にぐるまもありそうつに極込の青楼がちよいと
のぞきし花車な城郭たゝの宴らくちげへなりと粋
どやく酷哉連中 通里へ先生さぞお待かねトいひあけるうちに
コヤ先生ハまぐろ子 さんへ通里さんコヤ羅光さん廣里さん
お揃ひで此間ハごきげんもきらいかんこのごろでござい升子
廣へお見このごろ清士のさく火の夜いそんなくサ 通へひろいきく

たごとくに豆腐屋むこの志みくおる色男ぐこまつて蛇サ
まきに大和尚藤子は光源おまづいの臣ふ志てゝふれまき
例のごとくおぐいましだらくモウくを身ハたべません 廣へその年
いたゞなくても卯子浮山おくべな物の孫のらよくのらう
羅へこちらへおいで越なきゝつくらくハまぐい一夜もおだまり中
さねへ緑町におつ住居の所ハ廣里子などこのそつおら
いつまでもとのき 廣へりふのハ遠へござへませんたつて今青
柳ぐ別れこのら 通へモウ清息おきらうと思つてまいりアア

よつて見へ〽まで出来さえぎなきものゝねへこまりきん
たよ〽通十二酒志やアござへせん書つても口のあるといふのサおそへ
〽きんどこへよんなすつてらうテ〽通なんだのうつくしいといつてら
きこし煙草雛子だらうの咲しらく芸弟子なし芸者へよつ
たえ手お遠なし〽屋そこで二物公子連中ぐあつてらア〽通
二物との坊さ又ハ狂歌師の〽廣志のも名人サ私なども
おハさいソレ先代芝翫子花の露の短冊があつて此廣屋ハ狂歌師仲
〽通りつくやまひハうきの花なるアなんとのいふお

たつけ〽通これでハ花のおを坐たゞの随分可なりだ子
初茄子罷つてハ世をさるらちまてひろ口ぎのりかこぎ居の
〽廣是最高なら十点ハあるが私などの先生ハぶだらくら
〽屋ホン三狂歌おといへむこうて中ゝと見へるがのちつなおらいぬ
おゝ万葉ぶしお〽通ドレく是が万葉といふ本の始めで一現
だゞ絵入ずナ絵ハ大分ゐてい等でハ画稿ご〽廣十二サ万葉の
仮名をまじへてかいてハおせこ見やアたゞの志やきも同様な
人情本ぶ〽通下の絵ハおもしろいのアリだナちな[illegible]稲荷彩

いなりの隣りこの家ハこれがなんだろう　廣「これじやアひね
つて万葉の仮名をまじへてたけてりいちをかつしくねへきや
まつぶ子ト此坐のから入来る　通「そりやく是ハの此年頃ト部を見れバ
野郎も此通の伴ひ入来せし　首「これハござなくてもイヤ　松梅亭うじ
さればそれ久しく　廣「ぞんじながら此度御法り　首「おきさんまづ此坐
ハおくなし　喜「なんでこのさうきうらそぶおいびらう待兼
けましておかしま　だと見えるく　首「ナニうそじやアござへせんきのふお
約束でこのら私も参つてめせ女郎のひなくうまひそめをお

出しなさいまし　附子廣里さん此頃ハおうくを久しく承
りませんイヤ今何ことの万葉での歌ぶ詠ることのおつしやつさハ
何でござりまし　屋「その本サ　首「ハアそ是の家南仙窟の人案
永窓登満人トなのらしく先万葉がゝ子なんどゝ申せの
遊もあそやぐおしろいハこまりてで王母といふ仙女香　屋「西王母ガ
子　通「なぐ王母とも云ふの兄らん　首「いひませんほどなこの程かな
どうもよんどある事こりやアまろとしの指めへどやアおい
が唐詩の中にもあまたハ七言の律子西望すまたハ瑤池王母

降りとこのあるよ〽匡こちらの方にも何にのかハりもありませぬ
なハアちりめん志ぼといふがこれハ好きさ〽通あとハあの内ハ
未だ陰があつてがいつやらあちらへぞなり〽羅鮒やしさ〽お姫
のほうなら稲荷の西陰ごおめへ買つておまへの彼玉藻
の前子たのまれてこの〽通玉もの前ハ人手のないこつ全子
麁尾を洒出すやつの子金毛九尾こん寿尾の秘ご
らて〽匡是りいくト背さのづきとてしをそつて来る又さうこと白金の七まびらのでる〽匡是ハ只
く以髭向とも申すて門おきして三ハ格別子〽きんイエなどいつもお

がら何もあげません〽廣サアひとつおあがのんなさいまし〽きん玉
たく〳〵ハかしコレ初やお吸物をしやトへかつて〽通出たこ子おもじ
めなさい〽匡お客さまこのりもチトおつ〳〵子なりこく〽通出前の来ね〳〵
うちハ色でこせへぬまづごの廣里のそいろくろく〽廣来らいくこう〳〵の来
てるとみへ〳〵ハア施丁目を見せるな〽通施丁目とお客の
氣めへといつ志よ子見せるはかりごろう〽若あげやせう〽通てう
たいそう施丁目といふの曽祢丸さんハ家鑒家ござ
なぜあれ子だこのり全篇のおのらくヨット人の名迄ハ志つ

くわるどのどこの人で何を書くありませぬ〽（菅）むつかしいる
をおきなさい（けふ弥九いふてまけおしこある人すくむぬといふもののきうひ／ある男かえおくがりてこのひと同じくだせーしくこまらせるアリまするふ）
〽（菅）どふも唐の夏ハあつのる所の学びでないのでくハしくしらね
へのたしの戦國策にありましたらて〽（庭）十二あれハ荘子に出
てあるの中養生主の篇に庖丁よく牛を解くことどの哉せ
てありやした篇といふものよく車輪を削るゆゑに輪扁と
いふ又巧匠名を石といつて匠石といふなどこれ荘子にみへて
丁氏がよく庖厨のことを知つて宰烹する故へ庖丁といふ

のせこ丈ハ戦國策にハないやうで〽（廣）財をひとつ此徒従をいふら
〽（庭）あげよふお揖へならつねね〽（廣）かの〽迷しくおせへねへやつせそれ
ハそふと庖丁の和名をむ何といひやせう和名ハさすがはに
國学びの大人だのらおくまししそうなものでい〽（菅）されバやはり庖丁
ごねその鄙ひハいふらしもありやした菊も牡丹も其鄙ひサ人の名
を付るハ玄翁といふ僧が殺生石を割りたらいて其家
仙人麻姑といふ人の手の爪が鳥の趾だによつて背をかく物
を麻姑の手といふのさ（ありうらあをての扑庵ハ今まさに／とらふ風やらうくぐちより）〽（扑庵）さい菌総採って

振之ハおりろくハなくてひ〳〵のト河東ぶしをうなりながら来る通「おそし
くぞ入りなさいつておりましたお寺だろう朴「エお寺とハ
けしからぬ氣じやりざぶふ志ゆ達ございます廣「何サ此せ菩提寺
ではる此説法とやらのあるといふのハ先生例のくさまの宗
旨だから毎つていらうと思つてサ朴「十三異端（いえん）を学ぶそのくあまり
やアそこ田舎から出てる時店を持の寺がなくつてハおまぬと
いふ事で本町の店受の菩提所で此人がかの日蓮宗サ師れ
でも宦家と云んでらあそこのあれハ菩提所サハア横縞の

屋敷へちよつと見舞つてうち公（きん）ぢやハ先生なつて締の萬が
廣「まづ何ハともあれトきせるをまきたばこ入一口のんで朴あんへ（？）朴「それともアノ宗旨も一派
あつまると利益のあるそうきこえど身延へお参りなさる帝（さうまん）へ
さるやらの中谷で此説法があつて先達で久安いふものと
よそのからえりをすゝめられて聴聞（ちやうもん）志てその子もおもしろがつて通「清正（せいしやう）
公（こう）の此利益などハ強勢（ごうせい）なものサ菖「清正公ハいつさいチト志つぶ
テ廣「おせエ菖「マア唱えまつていらいのきゝ清（きよ）いといふ清（せい）の字を
せいといふハ漢音（かんおん）で是ハ呉音（ごおん）ハ志やうとよむべきのが清浄（しやうじやう）

の清の字などゝ又ますと訓ずべき正月の正の字もせいハ
漢音なれバ漢音で読ならバ清正この呉音でなけらバ
清正とのいふべきを清ハ清の清の字と正月の正の字と思
つくいひならハしハ俗例さ一生の生の字ハ先生などの附の
生聖徳太子の聖の聖人の聖摂政関白さ夜ニ意政の
字の文政の政ハ邦井といふ字情といふ字成といふ字醒といふ
字星といふ字のるいのたぐひ三十ほどのもあり其外ニな
定まつて書き志の道ハ湯桶訓も同様ごちゃら混雑す

るものハ正すべきるサ〳〵モウ学文のむかしハ志づくくらこの
らう曾祢丸さん氷のちるせいつでらう〳〵あげやう〳〵ひとり
押へてハ〳〵曾祢丸さん寫経家ごとの牛の糞ぞの味噌ほ智る
といふハ何ぞ言い事でもあるのの其の縁故を兼りさいツ〳〵あれ
ハアノ字写を志れものゝ主るくいふつもりで役にしてくれ道と
一体ハ牛の糞ハ甚いものさ仏前荘厳の具などに牛糞
を用ゐるの仏説に多くあるのさ最勝王経の無戈天女品ら
イヤ四天王護国品にの壇場に牛糞を塗つて修法する

ことゞのありさま御経に説くありやいなやしかれバ牛糞ハ當い
うらハあの宗旨でもやはり牛の糞も味噌なり法花も仏
ぞなるといふハいさゝかさまで牛ハ大尊なるものゆへ天子の
御車を牛車と唱へ法花経ニ大白牛車の譬へもありまた
仏の説ニ皆ら牛をバ波羅なり糞あり云んぐのもの牛の乳
を製して醍醐味とあるなどまた御経の意味のおらい妄
ならへるのち蘇婆子靈子経ニいで牛糞のことハあるらく
一遍仏の粉靈子経ニハ鳥糞を用ひく徳法あることもの

ありがたん獄といふハ此時ありてきまりけりぶハゝそれで
ハ猫も杓子もといふハぶといふなさいあれハ昔女子も赤子
もしらぐいるといふなさそれハねこも杓子もいかのなだの
てうちんとつり鐘位なものぐへそれでハこのつぼの底といふのハど
ふふ訳じやろうへそれハこつぼの尖といふのが間違へてこのつぼの
へといふ事しこのきこつぼの尖といふものハ尖をつけさいきまさ
ぬとまつてさまつて踊ぐのつまくねへうくのなさそれをこの
なのへといふやもの絣へせんアろうおもさものても言のさとるのハ

うきよの人といふものはまつてさへぶく〳〵と外の上へあがつたが
あがつて音のまるでいなさる湯をのんでよふな伏でいねへ
ア、きた様へ〳〵首様さんハ国学家での妙な事まで
アイまアおのずねなせへ妙なことまでえらんじておなさるのへそ
アレやア将儀さハ十二伝でちく〳〵見るといふじやアねへが仏の方
の事も一ト通り見てあのなくつちやアならねへがせまいとき
仏経ハ講釈せんで〳〵湯がいちで薬湯のよくせで中一がせまし
次手くさしそれも方便と号て附合ひの湯の花をいれて

やつぱりつまりやせん何も遠くさかのぼつてハおけ程どこ
アレやア何の宗旨論のやうなおつな此しだのあちらで念仏
おはれ言るといふの又それしの宗旨ハぜんて〳〵四門説さなどの首がさい
ぶん易行道どうぞ宗旨あるさ手い〳〵説があるさ
浄土宗の経文も似よつてアレハ宗旨の読んでの強盗へハ
人が飽食をしてうん〳〵といふほど牧子講やらの又ある
もなく物を喰ふ文ハきめただのでぶしてあぶといふ事を
人が妙な名薬を飲つて見たそれを一粒のむと喰

たわけのせゐで役体なく消て後のへつてしまふその丸薬ハ
今勢丸でござりまし讀出丸でござりまするといふまへ見及バ
ぬそのふしの何ごとといふハこれハ圖ごと答へるやうさへ皮屋
ならなめしをやいんでんやさんとあでも唐皮の蒲團
も紫皮の三物のあるごろうハ嘗め手せ文ちやアいけねへ
気るい叫しごろい皮屋だやアねへ厠で圖つき雪隠さへ通丸
茶甌雪隠とハぶふいふまされでいろそんなもんで雲茶ハ小
便桶で糞出のくそだのこいたごだかうつものへでこのときなは

夏むそのり出る葉菓だの通便をおっちやアいけ縁へ
東西くそれのら嘗そこでなせといふ于は茶を呑バ雪隠
へ行ふがいのだは于すむらうこれやア己しの所持の雪隠ぐ
といふ又罪をつくって山のごとく積悪なる人がよくその
罪の消てしまう是ハどふいふ妙な事のあるといふ
ハ念仏を唱へるその念仏ハよく五逆十悪の地獄を消
て无垢の浄土へ到らせるやうなその念仏ハ則ち何ごと
いふ于ハ無有地獄ごといふやうさへなぜといふ于罪のあつて

無間地獄へおちるといふのがずいぶん恐ろしいそれゆゑら

やはり念仏無間とは法門徒宗でもいつまでもいつけさ（通）おあ

るほど満復して千鬼薬の霊験の神薬と同じことでご

ざりは妙説でございませんトいふおれら甚の多うで（ぬき）ごめんなさいまし（やん）おつふ

やきさんお出なさいまし　毎日モウうつとしいお天気でござ

いません（ぬき）まいさこまりまする様へさふであぶなく疫くはやむさ

んなのら先頃のお薬をかへしていてきてございますす

（きん）ずいぶんございますへ（ぬき）あまのでていくでいくら大分おあ

かでへつてやはりございますね（きん）いや、ぷくはあのつト たばこを呑つける也

（ぬき）ありがたうおかげさまで大きによささうでございますね

からモおかしいくらふとぞんじまする（朴）きついよふな薬でこの

妙薬だの復のへつたといふ者（通）ちげへねへ（猪）きのどくかしあ

けくされさらし（朴）かねへ　コウ文鰩魚の煮つけなめく

のさうさとおやんなせへ　津山仕込のあるものらうて（きん）まるで

うおつしやいませ因果は是の是ごろらいつでも薬はたや

すまねせんト少すて寄る（ぬき）ありがたうもこおかんへなさいましたる

さぞおかしからう〽ごもつといゝさいまし ト お姉さんはそゝくさと出る 一下男の間より〽なんでも
嘘つき噂だのさ それ〽おあねさんどふぞ人の悪る物
だモシ〽お姉さん〽きこへねへ そうで〽無事ならまあ
らずまいバだの〽お姉さん早く合せばのことこの〽おめへをたんで
是非ともらアトいふお姉さんら〽ハイお嫁びなさいましたら〽あまたら
でト お茶をあげて〽イヨウ是ハおめづらしいぞぶいろつこそおいでなさいまし
朴菴さんどふしてやく何ぞございましたへ お姉さんハ
お客へさんを〽お帝頭といふ役向が 御身ハちつと難れる

子サアくこもちる〽様子一別以来位でハない二三別かと生
ごト是より おかしく色々者をいひつけなどしらく大どや
出となる

第十四回

倩もお姉さんハそのらくへ朴菴にあひなく華ひは寺所
の様子も嘘たく思ひ詳しきを〽通りも人々は一礼済
盃を持あひましこと座興がさしたるとうつくいた
ご馳走こしがあらく下手出〽まてとて朴菴さんおかへし

ぶりごねへけさやうさ傳ふもバモウ二年越になりまする子
「あなさんの夕方さなぞツ」ア、それハ作左衛門「それよりもこの
がくもんバかまでするいねるさうで韓国学びする人の
和語ハどうも何の借りあるを読のふやうでおかしくねア
うでなへてといふ事ハ雅ぐでかへてトうたを清んで事を
漏るの事例さニナトあのいかさなしでのト作右衛門このくハのまはりとこそめでたし
あげをとりたがるなま学者ゆゑく語気をたてゝ居る
またちらもたらすかぬきハきもをつぶしてゐる「まづ古玄機か
どんな老といふ者の学を前のこのおきにあやまりで浮

子本居大人をはじめ近くハ千蔭さん春海さんなどの
說のたぐひのきあれハ古事紀に日本武尊東征の紀
甲斐の坂おりの宮にまくのおかみに新治筑波を過ぎ幾夜
か寝つるとこのいふおかみのうへしにあるハ何の義とこのいつは
がくあるべく夜にハ九夜日にハ十日をトいふてこのあるの是
萬のやうなり考へるるぐいなくかかハ幾日ことといふ日のる
を算へこのうであべハ並へといふるさまれバ日日並ぶら
うかめとここそよめうでなへこ續ハ雲泥万里のたがひサ

近頃讀本なぞゝて闇雲にひねる操ぐ傀儡ふ画でなん
ぞ、書ハこむ書画の文誤りさえの作者衣ので八幡
ら書画と八見えるものゝで、あつハせめくもの事らきらずれバ
といつて極女時書ハいつのかでふ道だハ大へんさ人倫子
婁の字ハ陸か面白ろうがまづらあへとらいつく口でハなとこ
なべしを女郎花とよむ見げまらあめと讀こい子通か
あめハ見りい七あ我分出きねへさやアならねへツ朴ずお講訳
ごのきんぎらら一意味でくはせんをらつ座の鼻徳が

あるお婦さんの隱宅のはなしとうけたまわつたが
容のお隱居ハ思ひきやごさりやすト又おりひきやのお講訳
ハ鼎く語りごと隣なるところにおれ寂中こそのもへ德羅
孤なるべしあらへ隣に在の子でもこ鍋喜さ々のお年忌
へぐもお出かけなさらつくせつと学屋へもおんへなさらつく下
せへましぃ嫁ありのこくおン二十後ハ寺町へも度くお出なさい
ましたらくさやうさ度くお見舞申てお勢らしい學
情に入りましたこあなたのお世話をなさる時分と遠ひ

まつたく何のあつかひござりませんテト村朴菴いろ／＼とつゞひなさつて（さとしなどめきたる医者らしく）
（むすめ）〽ホンニおぎんの病気と申しませまするの私もさてこし
あんばいの見ふござりましてつひ子を連て下女の事なり
何のやめく者く知らせませんので恰くかくなりませんと（朴）〽おまち
きつくむつかしくいふさん死ましたの大丸新兵衛の
何ともの中一遍にておかんせなされうくらい生のつら悦く
おいとや事らく村氏の様子ではモウ大丈夫でございませ
う（むすめ）〽それハマア安心いたしましたトいふ折から（きん）〽お姉さん具服が
おはこびなさいませんか（娘）〽ハイト（立そふ所）見たくしハ朴菴さんに
困るお顔とやせたい事のございますからぜんたい子おやが
ねやそふとぞんじくおりましたほんに事ひとくござり
ませぬでおそくなりまして急度おかんなさつてくださいませんの
（朴）〽いさいしやうちでくサ（娘）〽ハイどなたもトかくれてくる（通）〽さいはんいつの
（羅）〽雲上ズいてのちつと高直ごの（疹）〽すこし兼氣湯の病に
（きん）〽見得モシどふしてくれぞんじてございましたへ（朴）〽おまへそ女子
しらぬものといふはなきと今の見と称せらるゝ何等の妖怪

たゞ与八さんといふくらゐのとこの番頭さんのところへくるし
のサ 升「ムヽアノ安録山がひとつまみるのの きん「イヤ立ひとつおやア
ないぞの目利ハあやしい子 通「大きにサあの目つきがおつだぜ
升「なにあんなものを 庚「そりやア嘘でもな 音「大人もいつまで大
おいらのら 通「大がいくらハ 音「やつぱり嘘ではないのかネいとふ
のさ きん「それやアいつの本町ハどこの内のことでございますへ
升「本町すゞでもあるもの きん「まアあんな事をいふのハ何さへす
出ばるのがあるだらうヨヤく いやだねへ 旅すやくなつて
モウらんしんゴヨカッの時から世間にまぎれのう居るそのを
こんな事をいふならありがたいがそのをいふなんでもある 升「本町のアレハおいらの大そう借金のある
内の出張居さるがしてな きん「ふくちやんさんの借金のあるから
革種屋だらう子 升「志まし 此事サトいふ子おきんハむねすぎる
田ひいて麻くらやく出ろく 何寄合のるおるへくと
さらとむなぎんやろしくねる 通「アヽヽリ 音「これハ大そうなあくび子
通「おめへぐらの長くしいお世しをだまつく出て根色と別バ
ねへ三馬ねの中本を見るよふにちつともちがハねへ実
まあくびの出るハな 音「三馬ものといふのが何あるものハあの方へ

京伝なんぞ三馬も大そうな書ておりやし
がやはり国学者の仏経を読ものハおそらくあるまいねへ〔子
是も仏経ハ薬の苦い能書と同じ事だけれども あの国
ぶりの〔広〕こまるといくモウ無点の小本でもあらうちまる
ぐ漢語訳で宋子雅のやつもり影ひづく子彼花下禅
をさらすまひらしい子〔朴〕いづ毀風家さい〔首〕こまるいいおら
京ろあのうこる人がそらいつくらくれちやアあたまるわ時分
のの〔通〕モウくろくおくびのへどのよふな長くてならねへ

まづたべかきとおいとまにまか〔屋〕いづまさい〔広〕こまるとのかト
あごるく深川のかるを〔首〕かへる時くさやうちする
〔通〕そんならい大人ハトこれより天ハいとまごひして出て深川ちがへて入来る八人と呼ぶそれいそのこまるいかげや本町のおいまき
の鉢とならんといふてせる男とそその後羊を深川へ入りとまるとても一
久されしが比毎くもこ与ハおどろく其のさもへろふらつせし出く
つかひすもしで又ついまそめでそも追ひ出され
南かおひんの方の居ゆとなりしく居こく来て〔今〕一日方ハおいでごさ
いまんのなヤモうらい雨ぞことないなめてあふこをいトやれとの
下谷の香なその望にきをつらくく〔さん〕それハおかまなさいな古文
まく炭ごろらのなとみんくたゞくる
ぐらいなまなそごらう〔今〕こまるでも今おあかさてとやつと

三十日経ハもけるがな朴ボクウ何のおもむきひの金本家さ
ら本町さらいふ所らたのミてらせつくナ今志やくといふ
さるひ逆ひ手金つくりじやさん金さんは次手お出の時ハ
逆ひ手叢みのきしを置く寄くおく置よ金宴手あるの
あげよふの上鍬手つみたるを出しらいて見るくおさめ手やる志らされが足をやるにハ話あと知りたる朴より
よりと志く入り芳藤たちなるの内談させるハ金こ咄もお
きんハそと志らぬそのまく朴菴の逆ひなりて宴へ変
く来りしがやっかかさんと深くちぎりてハ長ハ入知れバ

からふ中となりたれどもいまだお婦そ手ハあま
ずこ毎を朴あんいつくふ志らバいられバもかつのへげ
たまとめのなかもあんじいないと夜るなどもお婦そこの
隣りて居る事を志らねバおきんがうこへつのひあと
まやりし事度こおくおそくらへりくも足のめず志られ
バいよく其のくなりけるとなんさてまくしてなりから
度こ下女をつのひおく志きりて朴あんを呼ぶ当座
行まてくれど与八も居らくひきこもりの対面手酒肴を

出しそくなしつまりいろくの悪法をめぐらし此
ことを三人ないだんせるついに曾祢丸をつのひろく
悪ほうをきせる事ハ次の巻にあり

教訓女今川巻之四終